

研究区分	教員特別研究推進 国際共同研究・国際交流の促進
------	-------------------------

研究テーマ	米国の小児専門病院の視察における小児がん看護に携わる医療者との国際交流				
研究組織	代表者	所属・職名	看護学部・助教	氏名	丸山 始美
	研究分担者	所属・職名		氏名	
		所属・職名		氏名	
		所属・職名		氏名	
	発表者	所属・職名	看護学部・助教	氏名	丸山 始美

講演題目
北米における小児専門病院の看護専門職との国際交流 ーターミナル期にある小児がんの子どもへの意思決定支援に関する研究への検討ー
研究の目的、成果及び今後の展望
1. 背景・目的 我が国の小児医療現場において、治療決定権は親権者である家族に委ねられることが多く、看護師は子ども参加型の意思決定支援に難しさを感じている。また、子どもがターミナル期にある場合、看護師は子どもに意思決定を促す支援ができずに、苦悩を抱いている。しかし、米国においては未成年の子どもであっても自律的な決定を促す支援を行っているという報告がある。そこで、米国におけるターミナル期にある小児がんの子どもへの看護の実態を知ること、小児がんの子どもへの意思決定支援に関する研究についてグローバルな視点を含めて検討できると考えた。 本研究の目的は、米国における小児専門病院の視察や医療職者との交流を通して、ターミナル期の小児がんの看護の現状を知ることである。 2. 成果 2024年7月23日～7月31日に北米研修を行ったため、一部を報告する。ウィスコンシン州 UW Health American Family Children's Hospital の視察を行い、Palliative Care Teams（緩和ケアチーム）の看護師やソーシャルワーカーと意見交換を行った。施設には、子どもに使用している ACP（アドバンスケアプランニング）のシートがあり、子ども自身が自分の考えについて記入できるものであった。医療者はそれを用いながら、子どもの意思決定支援を行っていた。さらに、保護者に用いる子どもへの ACP の重要性を説明するための資料があり、子どもとオープンな会話が難しいと考える家族に対してもチームとして何度も介入していることが分かった。彼らは「最終的には家族が決断するが、子どもが話せる環境を調整することが大切である」と述べていた。 また、小児ホスピス（Agrace Hospice）の医師と意見交換を行った。医療職者は、対象となる患児や家族は様々な文化的背景があるため、その方がもつ文化を尊重しながら、介入していることを述べていた。また、医療職者「子どもは死を受け入れて、自分なりの言葉で伝えることができると考えていることを語っており、子どもの意思を確認しながら、緩和ケアを実践している現状を学んだ。 3. 今後の展望 看護師はターミナル期であっても子どもへの説明や子どもの意向の確認を重要視していた。今回の成果を踏まえて、ターミナル期の子どもへの意思決定支援の在り方を検討し、そのような子どもへのケアに苦悩を抱いている看護師への支援についても検討していく。